

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!



潮騒ジョブトレーニングセンターが活動の拠点として利用している鹿嶋市まちづくり市民センターで11月4、5の両日、恒例の「第11回て〜ら祭」が開かれ、今年も市民への感謝を込めて仲間達が製造・販売した「100円焼きそば」が人気を集めました。また女性メンバーが躍動した潮騒エイサー隊のステージ発表もあり、祭りを盛り上げました。例によって焼きそばには行列ができ、2日間で約2300食を売り切りました。潮騒のマン&レディ・パワーを如何なく発揮しました。

2017

11

仲間の交通事故死が 私達に問いかけるもの



潮騒JTCにとって最大イベントの12周年フォーラムを前に、悲しいお知らせです。私からすれば若い仲間がまた一人、天国に旅立ってしまいました(3ページに訃報記事)。これまでも潮騒では比較的多くの死を乗り越えて来ましたが、施設初めての交通事故による死者を出したことは痛恨の極みです。具体的な統計調査があるかは分かりませんが、依存症者が交通事故に遭うケースが多いことは私の経験からも十分理解できます。この国にダルクが数えるほどだった時代は、よくシンナー依存の暴走族の若者が幻覚妄想の中で交通事故死するケースが目立ちました。今では飲酒運転は厳罰化の方向になりましたが、加害者とならなくてもアルコール依存症者が車にひかれて亡くなる被害事故は、今も思い出したように報道されます。健常者に比べると依存症で傷んだ心と体はいろんな病気を招きやすいだけでなく、はるかに交通事故に遭遇するリスクが高いといえます。回復途上のスタッフが仲間の病院送迎などで車を運転することが多いだけに、潮騒JTCでも頭の痛い課題です。

都会と違って公共交通手段が脆弱な地方のリハビリ施設では、夜の自助グループミーティングに参加するにも施設の車に頼らざるを得ません。入寮者が増えて施設が大きくなれば、その分移動手段として必然的に車の台数が多くなります。リハビリ後の社会復帰に向けても必要なことから、潮騒では意欲あるスタッフには運転免許の取得を積極的に支援しています。中には免許を取ったとたんに行方をくらます「確信犯」もありますが、施設としては安全運転に関する注意喚起を促す努力は普段からしているつもりです。でも、何が起きるかは「神のみぞ知る」のが依存症回復施設の宿命であり、自己中心的な生き方をしてきた仲間が多い事もあって、(私も例外ではありませんが…)規則や管理には苦意識が伴うようです。結果、思うようにリスク管理が働かないのもまた潮騒の現実の姿です。

依存症は自分自身を傷つける「緩慢な自殺行為」とよく言われますが、今回亡くなった仲間もなかなか回復ルートに乗れない「長期滞留組」の一人でした。潮騒に繋がっても彼は病院との往復生活が続き、元々の依存薬物に替わって処方薬依存が進行していました。困った事に退院してもスタッフに隠れて精神薬をため込み、一気に服用していたことが分かりました。それだけ病気が深かったのです。私も手をこまねいていた訳ではありませんが、彼の日常に注意深く目配りして回復プログラムに取り組むよう促すしかなく、その間隙を縫って不幸にも交通事故で命を落とす悲劇となったのです。事故原因については地元警察の報告を待つしかありませんが、予想を超えた彼の死は「仲間の中に居ても絶対安心はない」ことを教えています。ふと悪魔に魅入られるのが依存症の落とし穴です。これもハイパーパワーの試練なのでしょうか…。悲しい事に、今回も施設葬には彼の家族の姿はありませんでした。でも、彼は潮騒の仲間達に「俺のような死に方をしないためにもプログラムを大事にしてほしい」という鮮烈なメッセージを残してくれました。合掌。

(センター長 栗原 豊)



「レイナ、もう苦しまなくてもいいんだよ…」

潮騒初の交通事故死者となった仲間を施設葬で追悼

破天荒な“パンクロッカー”人生を自認し、独特のスタイルと特異なキャラクターで潮騒JTCの入寮者に慕われたレイナ(本名・石井秀明さん)が交通事故で亡くなり、11月3日に鹿嶋市内の斎場で施設葬(送る会)が営まれました。翌日には地元の公営火葬場で遺体が荼毘に付され、仲間に見送られながら天国に旅立ちました。享年50歳でした。潮騒入寮者の交通事故死はレイナが初めてのケースです。潮騒通信10月号の背表紙には、新宿リカバリーパレードに参加した彼のスナップ写真が組み込まれていただけに、仲間達はレイナの不慮の交通事故死を悼み、冥福を祈りました。

レイナは東京都出身で、曲折を経て2012年(平成24年)2月に福祉事務所を通じて潮騒に繋がりましたが、それ以前の歩みについてはよく分かっていません。依存症による後遺症がひどく、記憶が曖昧な部分が多かったからです。潮騒に繋がってもなかなか回復のペースに乗れず、茨城県内や県外の精神科病院に何度も入退院を繰り返すなど、彼もまた難産な回復者の一人でした。

生前に自身が語ったところによれば、レイナは少年時代からロック音楽に心酔しロックバンドにボーカルとして参加。バイセクシャルボーカルを自称し、メジャーデビューには至らなかったもののTBSテレビの人気深夜番組だった「イカ天(いかすバンド天国)」にも出演し、売れなかったもののCD作品を残したといえます。しかし、早くからミュージシャンにありがちのダウン系薬物に依存し、幻聴や幻覚妄想に苦しみました。ここ数年は処方薬依存が激しくなり、スタッフに隠れて精神薬をため込んで一度に多量にのむトラブルも絶えなかったようです。

栗原センター長によれば、レイナは両親と兄妹がいるものの家族とはほとんど没交渉状態でした。施設生活では髪を赤く染めてトレードマークの白衣を身にまとい、病院では幻覚妄想なのか半ば演技なのか「俺は医者だ」と吹聴して担当医をてこずらせた場面もあったようです。

レイナは、10月27日夜10時過ぎに入寮していた中ナイトケア施設近くの県道で車にひかれる交通事故に遭い、急ぎ救急車で土浦市の総合病院に搬送されました。しかし、頭を強く打ったことで脳挫傷となり、5日後の11月1日に病院で息を引き取りました。レイナの交通事故が薬物依存症の後遺症が関係していたのかは、警察の報告を待たなければなりませんが、どんな形であれ仲間が死んだという冷徹な事実は重く受け止めるしかありません。

送る会では葬儀委員長の栗原センター長がレイナの遺徳を偲びながら、病院に搬送されても脳死状態が続いたように「人はなかなか死ねないものだ。残された私達は命を大事にして、レイナの方まで回復人生を頑張って生きよう!」としみじみ語り掛けました。仲間達が次々にレイナとの思い出を披露し、最後に全員が焼香して棺に眠るレイナに献花して送る会を閉じました。

比較的仲の良かったジョーさんは「レイナはアホな奴で、すごく手のかかる奴だった。奇想天外な話が多かったけど、人一倍おしゃれで人の事を気遣える奴だった。守ってやれなかったのが悔しい」と語り、スタッフのトムさんは「古い仲間であり、いつも白衣をまとっていて、ぶっ飛んでいた。外見からは思いつかない優しい男でした」と振り返りました。(潮)



今年も潮騒名物「100 円焼きそば」に長蛇の列 潮騒エイサー隊が鹿嶋まつり&て〜ら祭の舞台を盛り上げ

今年も潮騒 JTC は地元の鹿嶋市で開かれた秋季イベントに参加しました。残念ながら 10 月下旬に県立カシマスタジアム周辺で実施された今年の「第 27 回鹿嶋まつり」は、折から台風による悪天候で 2 日目実施が中止となりました。初日もあいにくの天気で来場客は少なく、潮騒では予定していた焼きそば作り販売がなくなり、直前に参加が決まった潮騒エイサー(鹿嶋琉球太鼓)隊のステージ発表に専念しました。一方、潮騒が講演会や自助グループミーティングでお世話になっている市内の活動拠点、鹿嶋市まちづくり市民センターの最大イベント「第 11 回て〜ら祭」は 11 月 4～5 日、同会場で開かれました。こちらは両日とも天候に恵まれて大勢の来場者があり盛り上がりました。

て〜ら祭では、すっかりお馴染みとなった「潮騒 100 円焼きそば」に終始長蛇の列ができ、商品の焼きそばの供給が間に合わないほどの人気でした。それでも製造部門を担う潮騒の男性メンバーらは手慣れた様子で見事なチームワークと連携プレーをみせ、次々に焼きそばを炒めてはパック詰めしていました。改めてアディクト達の秘めたるマンパワーの一端を示した形でした。焼きそばのパックには今月 23 日に開く潮騒 12 周年フォーラムのチラシを添えて購買客に手渡し、販売を担当した女性メンバーが「ぜひ潮騒フォーラムにも足を運んでください」などと PR に余念がありませんでした。

この日は潮騒農場で収穫した珍しい青パパイヤが展

示・販売されたほか、朝採りの長ネギが格安値で販売され、早い時間に完売となりました。ほかにも女性ハウス「るみの家」が、就労継続支援 B 型事業として取り組むクラフト工芸製品の販売もありました。潮騒の焼きそば販売については周囲から「他とのバランスを考えれば、少し値段が安すぎではないか?」との小声が漏れていましたが、栗原センター長は「あくまで潮騒の焼きそばは赤字覚悟のボランティアとしての取り組み。この鹿嶋地域で私達が依存症の回復活動ができていることへの感謝の意味合いを素直に表現したもので、いわば地元への恩返しです」と説明していました。

また、室内のふれあいステージ発表会では初日午後のプログラム最後に男女混合の潮騒エイサー隊が登場、祭りの盛り上げに花を添えていました。とりわけ猛練習に励んだ女性メンバーは技量アップが見られ、会場の見物客から盛んな拍手を受けていました。秋季イベントにおける模擬店での焼きそば販売やエイサー演舞などへの出演は、基本の回復プログラムを補完する側面の意味合いがあり、社会復帰に向けての大きな動機付けにも繋がっています。

※「て〜ら」=鹿嶋弁で「人達」を意味する言葉。て〜ら祭は、まちづくり市民センターに集う仲間(て〜ら)が主役となって日頃の活動を披露し、幅広い企画イベントで感謝を込めて参加者をもてなす取り組みです。

以下は、参加メンバーによる感想です。

(次ページに続く)

ツカ
感想文**性別を超えた仲間達の頑張りに
とても感動した**

潮騒フォーラムに次いで潮騒JTCが力を入れる「て〜ら祭」の責任者となって3回目の参加でした。今年は二日間とも秋晴れに恵まれ、お客様の人数も今までで一番多かったように思います。今年は残念ながら潮騒農場で収穫した焼き芋製造・販売は都合によりできませんでしたが、毎回長い列ができる超人気商品の潮騒のオリジナル焼きそば、潮騒農場で収穫した新鮮野菜、女性ハウスが作業で取り組んだクラフト細工製品を、それぞれ玄関前ロータリーすぐ側の地の利を得た模擬店スペースで出店・販売しました。

一日目の焼きそばは総数約1650食(昨年の二日分)を売り、結局2日間で合計約2300食を製造し、それを完売しました。この日の朝に潮騒農場で収穫したばかりの長ネギも早い時間に売り切れ、クラフト製品の方も何品か分かりませんが、それなりに売っていました。実際、売り子役の女性メンバーの隣にいた私は、2000円の高価なバッグを買っていたお客様を目にし、とても嬉しくなりました。地元では比較的珍しい野菜としての青パパイヤも売れ、私も「るみの家」の“そうさんタオル”を買いました(笑)。私にとっては参加した甲斐がありました。すべて終わった瞬間、なんとも気持ちよかったです。

実は今年も会計係を担当していたので、焼きそばを売る女性メンバーの隣で神経を使いながら見守りました。結果は、お客様に失礼のない対応ができたと思います。後はなんといっても、潮騒の持ち味である活気のある仲間達の掛け声(少しうるさかったけど…)声がよかったです。これが「潮騒焼きそば」作りの醍醐味と感じました。熱い鉄板の前で汗だくになって頑張った焼き担当・野菜担当・パック詰め担当の仲間達、ニューフェイスも加わって「お疲れ様!」でした。普段交流することのない農作業隊・女性ハウスの仲間とのフェロウシップもあり、充実した一日でした。新参メンバーが「実は僕こういう役どころが好きなんです」と話してくれたことがとても印象的でした。女性ハウスのメンバーが加わったエイサーの舞台では初披露の曲もあり、性別を超えた仲間達の頑張りにとても感動しました。

イチ
感想文**焼きそばやエイサーに
「仲間の力は凄い」と思う**

僕は今まで「て〜ら祭」ではポップコーン担当での参加をしていましたが、今回は初の焼きそばでの参加となりました。パックに盛り付けるだけの参加でしたが、一緒にやる仲間と楽しみました。僕は過去にマクドナルド

で働いていた経験があったので、超忙しい時でもお客様に向かって「いらっしやいませ」「ありがとうございました」というか声がスムーズに出せました。途中で焼きそばに添えるお箸がなくなったり、プラスチック容器が不足するという事態が起きましたが、みんなの力でなんとか乗り越えました。なんと焼きそばは初日だけでも1500食を売り上げました。その後に仲間のエイサーの演舞を見て、心が洗われました。改めて「仲間の力は凄い」と思いました。また来年もやらせていただきたいです。

アキラ
感想文**間違いながらも、いつもより
一生懸命に声を上げて頑張れた**

エイサーメンバーの皆さん、お疲れ様でした。最初はて〜ら祭に参加できなかった私でしたが、なんとか参加できるようになりました。今回は自分でも間違いながらも、いつもより一生懸命に声を上げて頑張れました。みんなと一致団結できた日でした。ステージイベントだけでなく模擬店での焼きそば販売にも加わりました。あまり仕事ができなかった私ですが、なんとか声を張り上げて売りました。私なりに頑張れたかな、と思います。なんでも経験です。今は潮騒12周年フォーラムに向けて練習に励む毎日です。

なん
感想文**ステージで躍動した女性メンバーが
とても格好よかった**

2日間お天気に恵まれた「て〜ら祭」で、私は朝から焼きそば売りに頑張りました。4日午後の潮騒エイサーの舞台も素晴らしかったです。ステージで躍動した女性メンバーがとても格好よくて、みんな笑顔が素敵でした。また両日とも長い列ができた焼きそばの販売 Tent ですが、作るのが間に合わないほど飛ぶように売れて、みんな大忙しでした。この日は心地よい達成感で疲れも吹き飛びました。また来年も参加させていただきたいです。抽選会の賞品も当たり良かったです。ラッキー!

ピノコ
感想文**チームの輪に入れたことで
感謝の気持ちでいっぱい**

て〜ら祭では焼きそばの販売と、「るみの家」で手芸の時間に製作した手作りのクラフトとタオルのぞうさん、農業隊が作った長ネギと青パパイヤの販売に関わらせて頂きました。私にとっては初めての祭りでの販売だったため、完売した時の達成感と充実感で、とても楽しい2日間を過ごせました。エイサーの演舞では間違ったところ、戸惑った場面があったのが反省点です。エイサーでは未熟者の私も出演させて頂き、嬉しかったです。何よりもチームの輪の中に入れたことで感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

近藤恒夫 インタビュー

〜タリクの32年・逆説の人生に光を求めて〜

ロイさんの手の中で踊ってきたから 道を間違わなかった



連載
第5回

ほとんどロイさん(神父)に おんぶにだっこだった

——前回、依存症を通して見える家族問題に触れていただきましたが、引き続き話を続けてください。

栗原 じゃあ今回は私から。どうしたって日本は、子供や子孫にいかにか財産を多く残すかが成功者の評価につながる社会ですからね。でも、人によっては負の遺産だってあるでしょう。さしずめ依存症を抱える私達は、その代表選手です。近藤さんもそうでしょうけど、私も「失うものは何もない」というのが強みです。だから、子供に残してやるものは何もない。唯一の財産といえば、長く任侠の道を歩んで家族を苦しめてきた自分が、晩年になって依存症の回復人生を歩いている、この生き様だけですね。私なんか、二人の娘からしたらダメ父親の見本ですが、これだけはお金には替えられない財産だと思ってます。

近藤 親としては何もない方がいいんだよ。下手に財産なんか残すからトラブルを生むんだ。よく親が死ぬと兄弟の仲が悪くなるもんな(笑)。アメリカじゃいつまでも銃による悲劇が絶えないけど、銃がなければそんな事件は起きっこないのと同じ原理だな。飛躍しすぎかね。

栗原 私の場合、家族の中でも私を慕っていた次女が最後のはしごを外してくれたおかげで「底つき」ができた訳です。そうして完全に突き放されたから、私も家族の足かせに囚われずに自分の回復に専念できた。もちろん誰だって親孝行はしたいし、子供には幸せになってほしいと願う訳ですが…。でも、それは自分の問題である依存症の回復があつてこそその話です。

近藤 俺なんか、ほとんどロイさん(神父)におんぶにだっこだったからね。「なんかやりたいな!」と思ったら、まずロイさんに相談する。俺の新しい計画にロイさんは「あ、またお金だな…」と察知して、「私は賛成も反対もしない。あなたが今までやってきたことで間違いはなかったから、僕が反対してもあなたはやるでしょう。だから反対も賛成もしない…」と常に言っていた。

「どうやらツネオ・コンドウが 困っているらしい…」

——やはり根本にあるのは人を掛け値なしに信頼するという、ですかね。

近藤 俺はロイさんには足を向けては寝られない。ロイさんは「今度はいくらですか?」と聞く。俺が「2000万円ほど…」と答える。すると実際に「ポン!」と2000万円ちゃんと準備してくれるんだからさ。

——それを立用立てるところが凄いですね。

近藤 もちろん空手形で俺にお金をくれる訳じゃないよ。ロイさんはあくまで(依存症の回復)活動に対してお金をしてくれる訳だ。「東京にいる日本人のヤク中が今、新たな計画でお金が必要だから…」とカトリック教会(米国メリノール宣教会)のネットワークを駆使してね。そうして世界中から献金が集まるから相当な額になる。だから当初の目標よりも多額になることもあった。

でも、あくまで俺の活動に対してだからね、きちんとした計画を立てないとお金は集まらない。そういう意味では日本の宗教はその辺りが下手だよな。もうロイさん死んで10年以上経つでしょう。いまだに献金してくれる人

たちが、海外にはいるんだよ。そういう篤志家というかロイさんの志に理解を示す人達が「どうやらツネオ・コンドウが困っているらしい…」とね。だから今でも毎年クリスマスの時期には、そういう人たちが献金してくれる。それもこれもロイさんのお陰だね。

——確かにロイさんの力は無視できないけど、近藤さんの人格的な評価もあると思いますよ。まあ他の(ダルクの)人達は海外にそうした人脈がないでしょう。せいぜい家族会に頼るしかない。それだって才覚がないとできませんが…。今のダルクにそういう人格者がいますかね? 自力ではスポンサーを開拓できるようなリーダーが…。そこいくと栗原センター長は逆境をバネに独力でノウハウを築いてきた訳ですよ。その苦労が実って、今あちこちで花開いている。

栗原 それは褒めすぎ、私の場合たまたま上手くいってるにすぎない。ハイヤーパワーの計画でそうになっているだけですから。

即座に小切手で2万ドルを 寄付してくれた信頼の重み

近藤 俺は30年、資金面では苦労し続けている。いくら夢を語ってもお金がなければ何もできない。俺は一貫してロイさんに「俺お金がないんだけど、どうしたらいい?」と半ば恐喝みたいな形で無心してきた。それでロイさんが「共同募金にお願いしてみたら?」とか助言してくれるんだけど、普通は「申請に来ました!」とかじゃん。でも、俺は相手に堂々と「お願いします!」って言えないんだ。そうした謙虚な姿勢が俺には欠けているんだな。まあ、お陰で今はだいふ鍛えられたけど…。

俺の生き方だとストレートに「今ダルクにお金が必要なんだ!」「オレが必要なのではなく、ダルクの活動に必要なんだ!」となる。そこのところは遠慮がないんだよ、性格かね。外から見たら駄々っ子だよな。まるで子供が「ちょうだい!」って言うのとかわからない(笑)。そんな俺の性分をロイさんはよく分かってくれていた。だからロイさんの懐の広さにずいぶんと助けられた。ロイさんの手の中で踊ってきたから、俺は道を間違わなかったのかもしれないな。

——ロイさんとの付き合いの中で何か思い出すエピソードはないですか?

近藤 かつて日米の貿易摩擦が激しさを増して、アメリカで日本車が壊された時期があったろう。ブッシュ大統領(パパブッシュ)の時だったけど、IBM社の日本支店の社会貢献を担当する支援部門にパパブッシュのマネー

ジャーが「ダルクを支えてやってほしい」と行ってくれたらしい。俺んとこに、その格好いいマネージャーが飛び込んできてさ、「コンドウさん、何か必要なものはないか?」と聞くんた。「お金がほしい。活動資金がないんだ」と窮状を訴えると、即座に小切手で2万ドルを寄付してくれた。「おっ、これはいい小遣いができた!」と思うじゃん。でも、そこにあるのは俺を信頼してくれているという事の重みだよな、もちろんロイさんの力に裏付けられたものだけど。改めてロイさんや教会の影響力は凄いな、と思った。この信頼は裏切れないな、とね。

国の世話になっていたら ダルクの仕事はできなかった

——なるほど、それでどうしたんですか?

近藤 だから無駄に使う訳にはいかないわな。それで俺は「ダルクがなぜ必要なのか?」という本をつくった。それとイタリアの施設に研修に行ったりもした。仲間とね、20万円くらいのツアーで教会に泊まりながら、当時アルフレッドという神父がいたじゃないですか。彼に通訳をしてもらってね。彼の教会には何もないんだよ。質素というか、そういう面は徹底していて、食べるものは固いパンとチーズ、ちょうど真冬で寒かったけどね。もしあれが心にもなく国に頭を下げて税金を使つての視察研修だったら、恐らく通りいっぺんの形で終わつただろうな。予算を消化しただけで、少しも実にならなかつたと思う。

つまりだな、国の世話になっていたら、とてもじゃないけどこんな大変な(ダルクのような)仕事はできない、ってことだよ。その意味が外国の施設を見てきて、俺分かつたんだよ。向こうは回復支援についての福祉や文化の厚みが違うんだ。この厚い壁は簡単には乗り越えられないなあ、と思い知った。だから、依存症治療の先進国(欧米)では、就労の問題でも潮騒がやっている「半就労・半福祉」が当たり前なんだ。俺達アディクトには、それが現実的でベターな生き方なんだ、という考え方が地域に根付いている。さしずめ日本なら助成には、すぐに自立が条件だとなるけど、そういう交換条件みたいな発想は向こうにはないんだ。

そう考えると、ユタカ(栗原センター長)はダルクの就労支援の形をつくつたという面で、俺の夢を実現してくれているということになる。俺にはユタカの真似はできないし、その能力もない。人にはそれぞれのタレントがあるし、みんな分相応の才能を持っている。全部もっていれば神様になれるけど、そんな人はこの世にいない。餅は餅屋でいいんだよ。(司会進行・広報部、次号に続く)



前回本シリーズで取り上げた潮騒食堂「おらげのかまど」は潮騒JTCの幅広い活動の特徴づける関連部門の一です。潮騒の就労支援事業の一翼を担いながらも、一般客の利用も増えるなど担当スタッフの健闘が光ります。かまどもスタートして今年11月で4年目に入りました。これを機に、途中から店を任されたヒロさん&ミカさん夫妻に話を伺いました。(取材&文責：広報部)

🍳 メニューづくりには今でも苦勞する

❓ かじ取りを任されて1年半ですが、お二人には飲食業界の経験はあるんですか？

ヒロ 過去に皿洗いやホールでの接客経験があります。

ミカ 私は喫茶店とかハンバーグ店で働いたことぐらいかな。

ヒロ 以前、僕達は二人でマッサージ店をやっていたから、同じサービス業という意味ではあの経験が役立ってます。

❓ 依存症の回復支援施設の直営食堂という特殊な形ですが、戸惑いはなかったですか？

ヒロ 面食らう事ばかりでした。何しろ前店長が急に身を引いたので、引き継ぎなしにいきなりのスタートでしたから。有無を言わず僕ら夫婦でやるしかなかった。なので、出たとこ勝負でした。

❓ センター長からの指示やアドバイスは？

ヒロ やはりメニューですね。お客さんに喜ばれるものを出してほしいと。調理場にはアルコール依存症のベテラン料理人もいるけど。僕ら素人には何を提供したらいいのかが分からなかった。百寿さん(潮騒関連の高齢者介護デイケア施設)なんかは一日二食(昼と夜)なので別々にメニューを考えなくちゃいけない。メニューづくりは今

でも苦勞しています。

❓ 居酒屋をやっていた前店長はたくさんのメニューをこなしていましたが、お二人の路線は？

ヒロ 彼は技量があるから定食、カレー、丼物、特に魚にこだわりが強く、直接市場から仕入れていました。腕のいい料理人でしたからメニューの数が半端じゃなかった。僕らからすると、よくやっていたなという感じ。

🍳 細かい事にこだわり過ぎないようにしている

❓ それでお二人が考案したメニューは？

ヒロ 自分達の力量を考えて、日替わりメニューを大きく肉と魚系の定食2種類に限定しました。その後は慣れてきて今のような定番メニューも提供できるようになりました。ラーメンも入れたら十数種類かな。

❓ かまどは潮騒の仲間の就労支援の場でもありますね。依存症の人達だけにコミュニケーションの難しさはありますか？

ヒロ 僕ら夫婦はノン・アディクトですが、一緒に働く仲間は依存症(男性一人、女性三人)ですので、細かい事にこだわり過ぎないようにしています。幸いミカが突き抜けた明るい性格なので、それがお店にいい形で出ています。

ミカ お互いのコミュニケーションに問題はないですね。ただ、少し仕事が遅かったり、こちらの思い通りにはいかない場合には、やはり人間ですからイライラが募ります。

❓ 具体的に注意している点はありますか？

ミカ 仕事って厳しい面は否めないですよ。でも、誰でもお客さんに喜んでもらったり、評価される喜びって大きいんですよね。だから、できるだけ楽しく仕事ができる雰囲気づくりには気を配っています。明るい職場づくりですね。

ヒロ 僕は基本掃除とフロアの仕事、接客がメイン、よく

冗談言ったりしてみんなを笑わせ、店の雰囲気を和ませています。

ワンコイン定食500円のラインを とんとんで維持できている

❓ 前店長時代に比べると一般客やリピーターの固定客が増えましたが…。

ヒロ よく「ここはどういうお店なの？」と聞かれます。依存症の回復施設の専用農場で取れた新鮮な野菜を食材にしているので、他よりも安価で提供できるんですよ。と。お客さんは好意的に受け止めてくれています。依存症と聞いて来なくなる方はいませんね。

❓ 一日平均どれくらいの利用客がいますか？

ミカ 営業時間は昼限定(午前11時～午後2時)ですが、この時間に来店する一般客は20～30人、隣の丸ちゃんラーメン(潮騒入寮者限定の専用食堂)は入寮者4、50人ぐらいですかね。受け継いだ当初は、一日たった3、4人という日もありました。

ヒロ 商業的な経営という意味では儲かっていませんし、まだまだ利用客も少ないです。

ミカ 一人あたりの原価は200円ぐらいかな、でもお米は潮騒農場でつくっているんでワンコイン定食500円のラインをとんとんで維持できています。課題はジョブさんや百寿さんの客単価が安い事。でも利益率アップを求めるとオーバーワークになりかねません。女性陣も普通には動けないので、その辺りが課題です。

❓ 実質の労働時間はどれくらいですか。

ミカ 仕込みは朝8時から始まり、終わるのはどうしても午後4、5時になりますね。でも、スタッフの皆さんよくやってくれています。本心かどうか分かりませんが、「女性ハウスにいるよりはかまどにいる方がいい」って(笑)。みんな楽しそうにしているんで、やはり働くっていいんだなと実感させられます。

ヒロ 以前は仕事を教えてもらったり、指示を受けたりする場面が少なくて、ただ立っているだけの様な感じだったようです。僕らが担当した当初は指示してやってもらっていましたが、少しずつ仕事を覚えてもらおうとみなさん自主的に動きますよね。メニューを考えてもらったりもしています。やはり仕事はお互いの信頼で成り立っており、皆さん任されているという自覚が生まれています。これって仕事する上ではとても大事ですね。

❓ 就労を考えていく上では大きな成果ですね。

ミカ 自分の頭であれこれ考えて動けるようになる。社会では当たり前なんだけど、ここでは凄い成長だなあ、と素直に思います。

ヒロ そう、今ではお客さんのニーズや意向に合わせても動けるし…。

今の一般利用客の状態は適度ないいレベル

❓ 栗原センター長からのアドバイスは？

ミカ 折に触れて気づいた点などで助言を頂いています。朝採れ野菜のこれを使ってみたら、などですね。あと「このメニューはできないか」という難題も頂くんですが、今のメニューをこなすだけでも手いっぱい状態なので、これ以上増えるとお客さんを待たせてしまいます。できないことはできないですね。

ヒロ 実際にスタッフも僕らもてんでこ舞いして、頭が回らないこともあるし…ね。

❓ 安請け合いして行き詰るより、「できないものはできない」とはつきり言うことが大事ですね。お二人は健常者。加わるメンバーは依存症。社会では一生懸命にやるのは当たり前ですが、やり過ぎるとオーバーワークで問題が出てくる。その辺りの匙加減も大変ですね。7割ぐらいの仕事ぶりでちょうどいい？

ミカ ルミ(女性ハウス「るみの家」施設長)さんからも、その辺りの難しさは聞いています。昼のピーク時には「もう遅いなあ…」「なんとかならないのかなあ…」とイラつく場面もありますが、この病気の特徴からみれば、皆さんそれでいっぱいいいいなので、「じゃあ次これお願いします」とやんわりと場面転換を促す工夫で乗り切っています。

ヒロ かまどを利用してくれるお客さんの数という意味では、今の状態は適度ないいレベルだと思います。時には混雑しすぎますから、そうなると僕ら健常者でもいっぱいいいい状態になります。

❓ かまどは当事者と支援の健常者がどう関わるか、潮騒における就労支援の在り方のモデルづくりかな、とも思います。中心となる幹の部分は健常者に組み立ててもらって、枝葉の部分をアディクトが関わる連携で、「やがては一つの大木に育てたい」というのがセンター長の思い描く就労支援の形でしょうか。

ヒロ 今のところ、いい雰囲気でできています。厄介といえば厄介ですが、社会の常識を基準にしないで潮騒流、かまど流のノウハウとセオリーで頑張ります。

ミカ そうですね。とにかく無理させたら落とし穴が待っている、という考え方で支援していきたいです。でも、お互いに遠慮はしていません。必要な事は言わなければ物事は前に進みませんから。

❓ ありがとうございます。(終わり)

受刑者からの手紙

帰住地を潮騒に身柄引受人を栗原さんで申請したい

いつも有難う御座います。こちらは流石に最北の地と言ったところで11月に入ってから雪も多く寒い日が続いて居ます。さて、今回こちらに届いたお手紙ですが、要点が良くまとめられてありとても読み易かったです。まず入寮の事なのですが出所後にすぐ入寮したいのですが、入寮するにあたりこちらも身柄引受人を決めなければならないのですが、そちらの方を栗原さんにお願いしても宜しいでしょうか…？私の出所はまだまだ先の事に成りそうです。私は現在仮釈放の対象と成っており、出来る事であれば帰住地を「潮騒ジョブトレーニングセンター」とし、身柄引受人を栗原さんとして、刑務所へ申請したいのです。

申し訳ありませんが、帰住地と身柄引受人を引き受けて頂けるか、次の手紙で知らせて頂ければ、すぐに登録致しますので、宜しくお願い致します。もう一つお尋ねしたいのですが、寮での規則、外出、外泊等を教えて頂きたいので、重ねて次のお手紙にて御教示お願い致します。出来る事なら早い段階で潮騒に行く事が決まれば、私自身落ち着いて生活出来ます。今回はこの辺りでペンを置きます。(北海道 S・T)

堀の中では本当の意味で薬物から遠ざかれなかった

突然の便り、失礼致します。今回DARC(関連施設である潮騒ジョブトレーニングセンター長)の栗原様の手紙を書かせて頂いたのは、断薬に対して今一度、私自身が立ち直るチャンスが欲しく、この受刑生活の中でも、色々とDARCが行っている活動の話を聞いた事がきっかけと成りました。私にとって、今回の受刑生活は2度目となります。初犯の頃は、薬物での猶予がついており、約3年の刑でした。ですが、しっかりと真面目に受刑生活を行った甲斐が有って、予定の刑期よりも随分と早く2年程での出所と成ったのでした。しかし、出所後僅か1年半後にまたもや捕まってしまったのでした。

私が前回の受刑で学んだ事は多く有りますが、薬物に対して言える事は刑務所の中で断薬出来るのは、当たり前です。そもそも“堀の中では”誘惑すら無いのですから、何のリハビリにも成っては居りません。私が社会に出てみて一番初めに感じた事でした。どんなに薬物を手に入れたくても、手に入らない施設内に居る限りは(堀の中)、誰にだって止める事は出来ると思います。それでは、本当の意味での“薬物から遠ざかる”事は出来ませんでした。

そこでいつも話題に上がるのは、DARCの存在でした。DARCは、社会の中で生活を送りながらにしてしっかりと薬物に向き合い、リハビリを行っているのです、「若しかしたら、私にも立ち直るチャンスが有るのでは？」と思い、本日この様にペンを執った次第です。周りに同じ悩みで戦っている方が居る心強さは、この受刑生活を通して、私は知って来たつもりです。どうか、今後“社会復帰した時”は、リハビリの為にDARCの“刀”をお借り出来たらと思います。いきなりこの様なお願いばかりのお便りに成ってしまい、本当に申し訳なく思っています。

追伸 今回の、DARCの方とコンタクトを取るの初めてです。色々分からない事だらけで正直、不安な事も多いので、助言の程を、宜しくお願い致します。もしも入寮する事に成った場合は、どうなるのか？何人位の方が居て、どの様な所で生活をして居るのか？他にも有るのですが、次回のお手紙に書かせて頂きますので、その時にはお願い致します。(北海道 O・K)

受刑者の皆さんからの手紙は、栗原センター長も加わって過去の刑務所経験を踏まえた回復途上のスタッフが数人で目を通し、できるだけ当事者の気持ちに寄り添って適切なアドバイスをしようと返事を書いています。不十分さは否めませんが、担当する当事者の回復にも大いにプラスになっています。

戦わなくても一日を 過ごしていける日を楽しみに

最近所内で勉強したのですが、50歳以上(私もその一人です!)の再犯率が80%、10人に8人は塀の中に逆戻りというのが現実のようです。意志が弱いからまた薬物に手を出すのではなく、薬物依存症は病気なのです。一步社会に出たら誘惑が一杯ですし、「良い品物が有るから、遊びに来ないか」とか「SEXの時に使った方がいいよ」とか、薬物の良さを頭脳で覚えているので、不治の病なのです。この「薬物依存症は一人で回復するのは極めて困難な病気」とされており、頂いた手紙にも「どんなに時間が経っても薬物の快楽を忘れられない自分が居ます」とありましたが、潮騒の仲間の方々もその悩みで苦しむ方が沢山いらっしゃるようです。苦しんで居る仲間達と手を取り合って今日と言う一日を大切に生きて、最初は悩み苦しみ、戦いから始まると思います。でも自分が回復した頃には、戦わなくても一日を過ごしていける日となる事を、今から楽しみにしています。何はともあれ薬物依存症は一人では治す事が難しい病気なのだ、と痛感しております。(北海道 N・S)

災難の9月だったが 10月はその分楽しみの多い月に

…前回記した採血の結果は10,000 増えて血小板の数値が73,000で、健康な人の3分の1しかなく、肝硬変によるものかと思います。不整脈の件は心臓病貼り薬が処方され、発作回数も減少し安堵している矢先に、今度は風邪(37.6℃)の行進と腰痛とダブルパンチでした。その後も更に右手親指腱鞘炎のトリプルパンチに見舞われました。シャーペン組立て最終工程の検査係として総体のチェック芯がスムーズに出るか不安でした。両手に持ちノックするのですが、単純計算では一日7万回近く動かします。このために腱鞘炎となり、約半月の間ペンを握る事も出来ませんでした。このように9月は私にとって災難の月でしたが、10月はその分楽しみの多い月です。体育の日、運動会、2、3類集会・誕生会等、食べる事ばかりですが、このような所の楽しみと言えば、食べる事なので…10月に拘らず出所の日までこのような小さな楽しみより有意義な生活が出来たら、と考えております。それでは今回のお便りはこの辺りで。(神奈川県 O・T)

刑務所での時間は決して空白の時間ではないと気づいた

前略 お忙しい中手紙を送って頂きまして本当に有難う御座います。潮騒では毎月色々な行事に参加して居るのです。個人的にはとても素晴らしい事だ、と思います。毎日、忙しい生活を送って居れば、変な事も考えず自然に“依存症回復に繋がる”のではないのでしょうか? あと“エイサー活動”に於きましては、重量10kgの太鼓を担ぎながらの演舞と云うのは凄いですね。同じ依存症の仲間が頑張っている知らせを聞くだけで私も元気が出て来ます。残刑がまだある私ですが、出所時の自分の姿を少し想像してしまいました。これから、残りの刑期を大事に過ごしていきたいと思います。刑務所へ来るたび、今までは一日を早く過ごす努力をして、時間を早くショウカする事だけを考えて生活して来ました。皆、口を揃えて言う事は「刑務所に居る間は消えた空白の時間。無駄な時間だ」と。でも、それは違う。私は気付きました。刑務所での時間は決して空白の時間ではなく、“その人の気持ちの持ちよう”で充実した時間にも素敵な時間にも成る、と云う事を。ですから私は毎日、笑顔を忘れず、その一日一日が実りある一日に成る様に心掛けて生活して居ます。本当に有難う御座います。(北海道 O・M)

しおさい俳壇

11月のお題

運動会

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.46

センター長 栗原 豊

2000(平成12)年暮れに逮捕され、浦和署内の留置所(留置管理室)で覚醒剤とアルコール依存による幻覚幻聴に苦しんだ私は、後にダルクに繋がってから私のスポンサーとなるトムさん(渋谷ダルク理事、坪倉洋一氏)からの手紙を受け取り、さっそく返事を書いた。「とにかく苦しい。幻覚幻聴の苦しみから逃れたい。どうか助けてほしい」と。すると翌年1月下旬には当時、台東区寿にあった日本ダルクのスタッフだったトムさんから、以下の第二信が届いた――。

「前略 お便りありがとうございました。私も栗原様と同様に十代後半から四十の後半まで約三十年の間、覚醒剤等の薬物を使い続けてきました。刑務所にも二度入り、もうどの様に生きてゆけば良いのかまったく分からない状態が続いていました。栗原様のように自分から手紙を書き、相談を求める気力もありませんでした。それでも周りの人達の協力でなんとかダルクにつながる事が出来て、同じ病気を仲間達との活動のなかで、その日から今日までの間、薬もお酒も止まっています。栗原様からの問いの答えにはなっていないかもしれませんが、これから後も、栗原様の事を知らせ続けて下さい。出所後に栗原様が、私共と同じ薬からの回復のプログラムにつながることを、同じ病をもつ仲間として祈っています。また、時間が許すようでしたら、お手紙を書いて下さい。お待ちしております。なお、本を送ります。読んでください。日本ダルク：近藤恒夫／坪倉洋一／スタッフ一同」

とりあえず幻聴幻覚を止める具体的なアドバイスを期待した私は、「なんだ、これだけか…」と事務的な返事に少しがっかりした。でも、1か月も経たないのに返事をくれたトムさんのスピード感到脱帽した。本誌「受刑者の手紙」でも分かるように、囚われの身には外の世界とのコミュニケーション渴望がとてつもなく深い。私の場合、過去6度の獄中生活とは異なり、7度目の逮捕・留置は幻覚幻聴による苦しみが半端ではなく、ひときわ人生の敗北感と徒労感がひどかった。目の前に自殺の二文字が何度かちらついたが、それを押しとどめたのはトムさんの手紙だった。私は疲弊した力を振り絞ってトムさんに再度、手紙を書いた。確かに留置中は、時間だけは有り余るほどある。私はトムさんにしつこく、「幻聴幻覚の苦しみはどうしたら逃れられるか教えてほしい」と留置所から思いのたけを返信にしたためのだった。(次号に続く)

立冬や文に温もる牢のなか／文の来て牢の窓辺の小春かな

運動会

校舎に響く
応援歌

特選句

めい

今では運動会は六月頃も行われるが、俳句では秋の季語。晴天の校庭で応援合戦でもしているのか、校舎に響くほどの声で歌う子供達の元気な姿を彷彿する句です。最近の子供達の声が喧(やかま)しいなどと言われるが、子の声ほど元氣付けられるものは他には有りません。

音花火

待ちぬる今日の
運動会

特選句

ゆうこ

今では天気予報の当たりも多いが、それでも運動会の朝は天気が心配、開催の知らせの音花火が聞こえると、子供も親も勇んで出かける。昔の田舎ではサイレンで知らせたのが懐かしく、また気をもむ実感の句です。

好きな娘と
一緒に走る

運動会

特選句

どい

中学生にもなると初恋も芽生えて、運動会で走る時やダンスなどでは手をつなぐこともあり、胸をときめかす。私も部活で好きな子がいて楽しい日々だったし、それらを同窓会などで語り合うのも懐かしい思い出の句です。

今月の秀逸句

運動会

シャッターチャンスの

ゴール前

みく

運動会では夫々に元気な子の姿を見ますが、ことにゴール前では子も応援の親も力が入る。それらを合わせて写真のチャンスでもあり記念のメモリーで実感の句です。また「フライング焦る気持ちの運動会」も佳句。

親と子の

二人三脚

運動会

こば

小学生では親に引きずられて走るのを見ますが、中学生で男子なら対等に走れるし、親にとつては頼もしく思う時でもあります。最近の子供の事件も多いが、運動会などを通じて親子が睦み合いたいものです。

村中の

子供出てきて

運動会

あべ

村と言えば小中学校で、そこでの運動会は祭りの様なものでことに小学校は賑わう。今では千人に満たない村が運営に苦慮する時代だが、運動会ともなると村中の子も人も参加して家族的でもあるが、過疎化や昔の郷を思う句です。

子供より

親の張り切る

運動会

ひろ

幼稚園や小学校の運動会などでは、子に親の強さを見せたい思いから張り切るが、普段の練習不足は否めず転んだりもするし、中学生ともなると恥ずかしいと言われたりする。

運動会

孫がリレーに

選ばれる

おの

クラス対抗や地区対抗の競技に孫が選ばれると親には嬉しいが、負けずに走れるかと心配でもある。まして孫ともなれば祖父母には気ももめるし、大役を果たすと褒美に何か買って上げたい思いにもなる。実感の微笑ましい句です。

諸堀りや

小さき諸とて

子等はしやぐ

ゆたか

幼稚園や小学校などでは諸(いも)堀り、田植、果物狩りなどあるが、諸堀りは堀出す諸の大小や形にも歓声がわく。人には元々耕作する本能があるのかも。実感の微笑ましい句です。

佳作

晴天の運動会を楽しみぬ	かよこ
運動会そこに子の日の吾が居ぬ	まこ
運動会一等取るのが楽しみだ	あきら
駆けっこは一位取りたい運動会	ちやこ
運動会うちの子一等嬉しいな	みく
^{てびさし} 手廂に姿追いたる運動会	ゆーみん
綱引きや赤勝て白勝て運動会	びのこ
お祈りす晴れるといいな運動会	れいこ
音楽に心も弾む運動会	くま

運動会心込めたるお弁当	しま
花形のアンカー走る運動会	みく
^{かほちゃ} 食卓の南瓜の煮付け母思ふ	あつちゃん
運動会子供と走る徒競走	いるか
運動会棒倒しには負けないぞ	しの
紅白の玉が躍るよ秋の空	ひろ
綱引きの子等の力や運動会	くり
運動会親のカメラの追いつかず	ゆたか

どっこい

私も生きてます～我が回復記～「ブーちゃんの回復記」

第11回

共倒れを防ごうと悩んだ末に離婚を決意した嫁の心情

世間では「好事魔多し」(良い事はとかく邪魔が入りやすい)とよく言われますが、これは人に関して起こる一般的な状況を指している諺です。アル中の場合は文字通り自らの依存症に絡んで事態が悪化していくので、問題の根は向こう側ではなく、あくまで当事者側にあります。なので、この教えも同じようには当てはまりません。僕の場合アルコールに問題はあるにせよ、やっと運が向いてきたかに思えたのも束の間、せっかく親方から受け継いで手に入れた老舗もつ焼き店を手放す羽目になり、同時に家族も信用も、何もかも失ってしまいました。

酔った勢いで家の中で刃傷沙汰もどきの騒ぎを起こした事で、僕は初めて埼玉県内の精神科病院に入院することになりました。でも翌日正気に戻ると、医師に「先生、妻が大げさに言っているだけです。酔った勢いでちょっと騒いだけですから…」と巧妙に自分の病気を誤魔化そうとしました。しかし、嫁はこの病気が一筋縄では行かない事を一步先んじて心療内科で学び、共依存についても理解を深めていました。結局は共倒れする前に僕から離れる事がベターな選択であると、悩み抜いた末に腹を括ったようでした。長くはなかった結婚生活でしたが、振り返ると元嫁は賢い判断をしてくれたと思います。

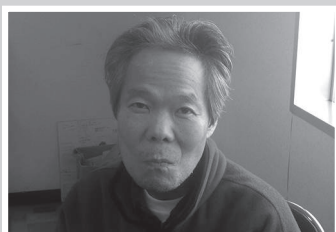
そして入院5日目には覚悟を決めた嫁が病院に来て、店の譲渡契約書と僕の実印の返却を求め、それに嫁の印鑑が押された離婚届けを持参して、「この三つの条件を了解すれば、あなたはすぐに退院できるわよ!」と詰め寄りました。早く退院したい一心の僕は、「分かったよ」と投げやりの気持ちで応じ、退院できました。嫁はさっそく区役所に離婚届を提出し、僕たちは正式に離婚となりました。そんな状態でも僕は知り合いに数千円を借りて、夜には酒を飲む生活でした。家(賃貸マンション)には帰ったり帰らなかったりの状態が続き、家に帰った時には飲み代欲しさに、家のテレビを叩き売ってしまい、帰宅した幼い娘に泣きつかれた事もありました。まったくひどい父親です。

今でもよく覚えているのですが、離婚して間もない2009年の暮れに、僕は2回目の入院となりました。今度は依存症の治療プログラムのある本格的な精神科病院でした。もう僕はどうしようもなくなっていたのですが、一人では踏ん切りが付きませんでした。元嫁に促されてしぶしぶ一緒に行ったのですが、病院の受付窓口で「奥さん!」と呼ばれた際に、元嫁は「私もう嫁じゃないので…」と語気を強めました。病気の深かった僕は、自分の非を棚に上げて「最後まで嫌味だなあ…」と半ば怒りを禁じえませんでした。典型的なアル中のなれの果て、体だけでなく心もみじめに荒(すさ)みきっていました。

(次号に続く)

11月のバースデー

ハンペン



「ちゃんとやってるよ!」

ナン



「いい男に写してよ(笑)」

マキ



「どうも宜しくです」

11月の行事予定

- 11月4・5日 て〜ら祭
(鹿嶋市まちづくり市民センター)
- 11月9日 潮騒俳句会
- 11月12・18日 秋元病院メッセージ
- 11月23日 潮騒12周年フォーラム&パレード
(PM12:30~、鹿嶋勤労文化会館)

12月の行事予定

- 12月14日 潮騒俳句会
- 12月10・16日 秋元病院メッセージ
- 12月23日 潮騒クリスマス会(予定)
- 12月24日 潮騒家族会

※下旬に年末恒例潮騒餅つき大会

献金・献品を頂いた方 (11月15日現在)

- ・富安 妙子 様 ・菊池 洋一 様
・高橋 清太郎 様 ・上田 礼子 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただきます。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

世に数多い障害者の支援福祉施設の中でも、ダルクに共通する課題は仲間の定着率の低さだろう。施設ごとに提供するプログラム期間には差があるとしても、スリップや逃亡、強制退寮などで円満退寮者が少ないのが実態だ。これについての調査結果データがあるかは分からないが、潮騒 JTC でもスタッフを含め、いつの間にか施設を去るケースは少なくない▼中堅スタッフとして仲間の信頼が厚く、外野から見ても「とてもいい回復をしているなあ」と密かに思っていたメンバーが、いつの間にか姿が見えなくなるのも珍しくはない。その仲間達と偶然にダルクフォーラムで出会ったり、施設のニュースレターで回復記を書いているのを目にしたりする▼こうした“ダルクツアー”組が登場するようになったのも、全国各地にダルクが普及してきたからで、それ自体は歓迎すべき事である。入寮したもの、当事者が施設のリーダーとそりが合わない事もあるだろうし、思い切って施設環境を変えた事で回復のルールにのれる事もある。回復の在り方について選択肢が増えた事は、掛け値なしに歓迎すべき事ではある▼その反面、“ダルク擦れ”したメンバーも散見されるようになった。環境因子は無視できないとしても、回復の基本は当事者の資質や性格を乗り越える霊的な目覚めと成長にある。正に神(ハイヤーパワー)の領域と言われる所以だが、それだけに地道な「今日一日」の回復プログラムの取り組みが重要になる▼気になるのは、とすると当事者が自らの中途半端な回復を棚に上げて、ハイヤーパワーをその正当化の理由付けにして怠惰な自分と向き合うことから逃げたり、施設や他の仲間に責任転嫁する身勝手さへの自覚を持っていないメンバーの姿だろう。もちろん依存症という困難な病気の本質はあるにせよ、これに謙虚に立ち向かう姿勢が原点では問われるように思う▼そうした意味で潮騒 JTC が独自に取り組んでいる「潮騒アディクションセミナー」は、とても貴重なメッセージの場であると思う。彼らの存在は潮騒の入寮者に「施設がいかに恵まれているか」を示唆してくれるからだ。外部のメッセンジャーの言葉に謙虚に耳を傾ける意味合いは過小できないと考える。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2017年11号

Contents

- P② 「仲間の交通事故死が私達に問いかけるもの」
- P③ 「レイナ、もう苦しまなくてもいいんだよ…」
潮騒初の交通事故死者となった仲間を施設葬で追悼
- P④ 今年も潮騒名物「100円焼きそば」に長蛇の列
潮騒エイサー隊が鹿嶋まつり&て〜ら祭の舞台を盛り上げ
- P⑥ 近藤恒夫インタビュー 第5回
「ロイさんの手の中で踊ってきたから
道を間違わなかった」
- P⑧ 2017 シリーズ企画「潮騒ジョブってどんな施設なの？」
その7 続編：潮騒食堂「おらげのかまど」
- P⑩ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 11月のお題「運動会」
- P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」/ 11月のバースデイ
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行：

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

